

〈FD 資料〉

## 新任教員の春学期

— 4 か月間の授業と学生についての私的記録 —  
(上)

川 畑 隆

私は臨床心理学の教員になった。慣れないというよりは大学のことを知らない春学期は、授業の準備などでたいへんだった。京都府の児童相談所で働いていた私が新しく大学という場の日常を与えられ、その日常のできごとによどのように影響され、過ごしたのか。以下はそれらについて授業や学生との交流を通して書きとめたものだ。

FD (Faculty Development, 授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な取り組み) という言葉を、教員になって初めて聞いた。大学の先生がたも頑張っておられるのだなあとと思ったものだ。私は組織的にはなく、新任、いや新米として個人的に頑張った。その私的記録がまさか FD の重要な資料になるとは思わないが、何らかの参考資料にはなるかもしれない。異なる職場から飛び込んだ者だからこそ気づいたことや、逆に気づかなかったことがあっただろうし、初めての春学期の 4 か月間、新任とはいえ私も教員の一人には違いなかったのだから。

いや、もっと積極的に自分を押し出してみよう。私は学生たちのなかに入り込もうとしたのだ。そして彼らを一方的に写生するのではなく、私との相互的な関わりあいそのものを取り出して描きたかった。そこには私に呼応して反応する彼らと、彼らに呼応して揺れる私がリアルにあったのだ。そのような私を含んで作り出されている状況の一つひとつを、私は意味あるものとして感じていた。そして、授業をよりよく創ろうというときに、私という教員はそこに動かずにいて学生を変えようとするのではなく、彼らとの関係をいかに活きたものにし、そこに発展的なものをどう含ませる

かを自分に求めていきたいと、考え始めていたように思う。

以下の文中、私の授業などでの出来事は支障のない範囲で明かしたが、個人のプライバシーには配慮をしなければならない。そのための工夫を内容の本質を損ねない範囲で施した。学生たちの姿はもちろん私のフィルターを通したもので、「そこ、ちょっと違うのよね」と言いたい学生もいるだろう。でも、私はそう思ったという私の側の事実を書いた。

私が私なりに経験したこの京都学園大学でのことはそこだけのことなのか、どこでも見られることなのかは、私にはわからない。でも、友人や世間から聞こえてくると異質のことが起こっているような証拠はない。どこでもあるようなことが私の前ではこのように繰り広げられたということのかなと、勝手に思っている。

いずれにしろ、私は若者との人間関係の生(ライブ)状況に投げ込まれたのだ。

## 1. ゴールデン・ウィークはまだか

3.29.水／キャリア・アップ指導<sup>(注)</sup>：明後日までは私はまだ京都府職員だ。年次休暇をとっての就任前のボランティアで、私がゼミをもつ予定の新3回生の2回生秋学期の成績表を渡すのと進路に向けた指導を、ワケのわからないままに行なった。私が児童相談所から来ることを聞かされていて、それで私のゼミを選んだという学生が何人かいた。

(注) 新学期が始まる前の成績表渡しと進路に向けた指導をこう呼んでいる。

4.06.木／フレッシュマン・フェスタ<sup>(注)</sup>：人間文化学部の新入生の歓迎会がaホテルであった。御所まで歩いたり、昼ごはんも晩ごはんも一緒に食べたり、北海道や沖縄から来ている学生もいるので、最初はよそよそしかった新入生同士がだんだん喋り始めているのを見て微笑ましく思った。終わってから私は前職場の歓送迎会に向かった。

(注) 在学生中心に企画し運営する新入生歓迎会。

4.10.月／演習Ⅲ A (ゼミ)・発達臨床実習：この日が学生にとっては3回生になって初めて、私にとっても初めての授業だった。口の字型に座って一人ずつ自己紹介を求めたが、みんなあまり元気がなかった。私も自己紹介をし、その続きで児童相談所の紹介をしたところ、それだけで時間がきてしまった。演習Ⅲ Aに続いての同メンバーでの発達臨床実習では、今後の授業の一端を紹介するつもりで新版K式発達検査2001の検査用具を見せながら、検査のことやら発達相談場面のことを話した。でも、私一人ですっと喋ってしまって、あまりよくなかったなとちょっと元気がなくなった。みんなは最初から元気がなかったように見えたのだが、その理由はあとからわかった。みんなはこれまで授業で一緒になったことはあっても、ほとんどお互いに知り合っていなかったのだ。元気がないのではなく“人見知り”みたいなものだったようだ。

#### シラバス(履修要項に書いた授業の説明)

##### 演習Ⅲ A・川畑(春学期), 演習Ⅲ B・川畑(秋学期)

主題：発達臨床心理学, 子ども・家族臨床やコミュニティ・アプローチ(地域社会を視野に入れた方法)を中心に検討を進める。

受講者への要望：発達臨床を深めるためには、社会的な事柄への興味・関心も重要なので、新聞の記事などにも目を通してほしい。

概要：子どもに関する臨床を適切に行なっていくためには、子ども自身へのアプローチだけでなく、子どもが育つ場への援助が必要である。そして、子どももそのまわりの人たちも様々な社会的背景をもってそこにいるので、それらのことについての理解は欠かせない。また、援助する側にいる私たちも様々な背景を持ちながら、生身で対象者に関わることになる。そのときに自分による自分の管理、幅の広い臨床心理学的視点、他の近接領域との協働(コラボレーション)などもテーマとして浮上する。臨床心理学、対人援助論の基本的な事柄をおさえながら、これらの問題意識のもとに入門的な内容について議論、実習などを行

ない、それらのことが各自による自分自身に引き寄せたところでの研究材料の発見につながればよいと考える。

#### **発達臨床実習(春学期)**

主題：発達臨床場面でよく用いられる新版K式発達検査2001や、事例理解のために有効なジェノグラム(多世代家族関係図)を材料にしながら、臨床的観察力や理解力、思考力を高めることに資したい。

概要：発達臨床に関して基本的に必要な具体的な技術について、入門的な実習を行なう。基本は、「よく聞く」「よく見る」「よく考える」ことなので、そのことを頭におきながら、以下のことを実施したい。新版K式発達検査2001は、発達相談や子どもに関する様々な相談の際、子どもの発達状況の見立てをするために、現場でよく用いられている検査である。具体的な実施法を理解し、実際に検査者役、子ども役になって試してみたい。また、ビデオによる疑似実施場面をよく観察し、そこで起こっていることをつかみ、そこにどういう意味が見いだせるかについて、討議を行なうことにする。さらに、子育てに悩む保護者の相談場面をロールプレイし、保護者の気持ちの想像や、それにどう対応すれば、どんな状況が生まれるのかなどについて体験できればよい。また、ジェノグラムをとおして家族を理解する方法について疑似事例を用いて検討すること、その他を予定している。

4.12水／大学院臨床心理基礎実習：今年大学院に入った5名と私を含めた教員2名での2コマ続きの時間である。合同家族面接風に輪になって座って家族面接さながらに始めた。お互いにいろいろと話した。一番の私の感想は、たったこの7人で過ごす週1回3時間のなんと自由で贅沢なことかということだった。みんなにも言ったが、大切にしたいと思った。

**大学院臨床心理基礎実習(2コマ続き, 教員2名担当, 春・秋学期)**

主題：受講生自身の自己理解を深めながら、臨床事例を担当するための基本的な態度や方法を身につけることをめざす。

受講生への要望：自分の能力を磨くための努力と工夫を、自主的に行なってもらいたい。

概要：春学期は、臨床心理職をめざそうとする自分に目を向けてみるところから入り、面接時の自分は相手とどんな角度で向き合い、視線はどこを向き、身体の力はどのように配分されているのかも再確認したい。また、単なる“礼儀”レベルを超えて対人援助業務を構成する重要な要素である、相手(関係者や実習先も含む)への挨拶の仕方や態度、求められることへの対応についても取りあげる。その他、相手の理解、対応の柔軟性、家族システム論的視点などに進み、外部臨床機関の見学も行ないたい。秋学期は、カウンセリング・心理療法の基本構造を知識として理解することと並行して、ロールプレイによる応答練習を丁寧に行ない、相手の感情の動きを実際に疑似体験し、その気持ちを言語化・意識化する訓練を実施する。同時に、グループディスカッションや様々な体験学習を通して自己理解を深められるよう、さらには訓練途中の不安や同一性拡散(自分が何のためにそれを行なっているのかわからなくなることなど)の体験なども受けとめられるように援助する。

〈私ともう1名の教員による共同執筆〉

同日 / AさんとBさんの来室：4回生のAさんとBさんが研究室にやってきた。Aさんは、発達臨床関係に興味をもっている学生なので、K先生から指導の協力を頼まれている学生で、Bさんはその友だちだ。2人とも郷里が同じで、発達臨床の勉強を郷里に近いところでたくて、ある大学の大学院をこの夏に受験するということだった。どんな勉強をしたらいいかとその大学院の過去問題集を持参していたが、むずかしそうな英文が並んでいた。英語の勉強と一般心理学と臨床心理学のひとつおりの勉強をし

ておくようにと、助けにも何にもならない助言をした。

**4.13. 木／発達臨床心理学と学校臨床心理学：**この2つの授業は両方とも子どもなことなので、まずは児童相談所のことを話すのだが、授業の対象学年が違って両方聴いている学生が少数ながらいることもあって、できるだけ違うことを話すように気を遣う。前者は学生が少なめなので、こちらはじっくりいい感じで話すことができる。後者は大教室でざわつくのだが、「虐待」という言葉や具体的な子どもの例の話になると興味をもつのか、学生はおかしいくらいにこちらを見る。

#### **発達臨床心理学(春学期)**

主題：児童期の発達臨床を中心に、具体的なエピソードなどとおして複雑な社会的諸要因も描出しつつ、心理士の動きの実際やあるべき姿、発達臨床心理学の方向性について述べたい。

受講生への要望：子どもから高齢者にいたるまでの生活、発達に関する事象や社会の動きは様々に報道されている。それらに日々接して思考することも、発達臨床心理学を考えるために重要なので、ぜひ勧めたい。

概要：発達臨床心理学のなかでも、今年度は児童期、思春期ぐらいまでに焦点を当てる。青年期後期(大学生)以降については参考書を開いてほしい。発達臨床心理学を実践し支える現場は多岐にわたるが、担当者は児童相談所勤務を経ってきたので、その経験をベースに児童福祉臨床を語ることになる。児童相談所になされた相談はいくつかの相談種別に分類されるが、その分類名におおまかにそって発達臨床心理学を区切り、それをキーワードにして、ぞれの調査、診断、指導、治療、協働(コラボレーション)の実際について伝えようと思う。発達臨床は検査室や治療室のなかだけのものではないし、心理職しか携わらないものでもない。様々な場所、様々な職種の人たちが、対象者の幸せに一步でも近づくためのひとつの拠り所としている。相談された症状や問題行動を“治す”ためには“育てる”視点も同時に持たなければ、少し

でもの幸せにはたどりつかない。協働が求められる所以である。

### 学校臨床心理学(春学期)

主題：学校における臨床心理学について，教師，スクールカウンセラー，外部機関の専門家，いずれの立場であっても検討しておきたい事柄について述べる。

受講者への要望：教育，学校に関することは新聞などでよく報道される。学校臨床心理学の背景を知るためにも，興味をもって目を通すことを勧める。

概要：子ども，その保護者や親戚，教師，また地域や関係機関の人たち，そしてスクールカウンセラーも，人間関係のなかで相互に影響を与え，また受けながら生きている。そしてそこで生じる問題事象は，個人に病気や障害などがある場合でも人間関係をとおした社会的文脈のなかで維持され，解決への努力は様々な働きかけや人間関係の調整によって行なわれる。したがって「魔法」のようなものが事態を好転させるのではなく，何らかの援助の必要な事態について，どんなことが起きているのか，どのように調整していくかについて，必要な情報にもとづいて自ら考える(仮説を構成する)ことによって，より有効な態度をみつけていくことが重要である。この講義では，学校臨床心理学に関する具体的な事柄やエピソードなどをとりあげながら，子どもたちにとっての家庭，地域，学校での生活におけるバランスのよい「育て」や「援助」とは何かについて考えたい。

同日 / 心理学基礎実験 B：私と実験心理専門の非常勤講師と 2 人で担当する。初っぱなから「<sup>(注)</sup>一対比較法」という方法でデータをとり，むずかしい数式で統計処理をする。私が一番苦手な内容だ。でもそこに居なければならない。質問はすべて講師の先生にと水路づけしたのだが，私でも答えられそうな質問には答えないと格好がつかないような気になった。それで 1，

2の質問に答えてみたのだが、あとから講師の先生に聞いたら私の答えは間違い。人生を教えられた。身のほどを知らなくてはならない。次週、ありのままを言って訂正し、学生にお詫びすることにした。それから、学生は1回生のときにはほとんど本格的な心理学の授業はなく、これが初めての心理学とのご対面。それがかなりむずかしかったものだから、こんなはずじゃなかった、やっつけていけるだろうかと言葉に出して不安がる学生もいた。私もその気持ちは体験者としてよくわかるし今でも同じだから、これも次週、みんな通った道だから大丈夫と励まसानけりゃと思った。

(注) 心理学実験法の1つで、各刺激を他の刺激と比較し、上位にあると判断された回数とその比率をもとに刺激間の距離を求め、特定尺度上に位置づけようとする方法。

#### **心理学基礎実験B(2コマ続き、教員2名、春学期)**

主題：心理学の基本的な研究方法である観察法、面接法、質問紙法、心理検査法について実習する。

概要：人間を理解するための心理学的方法には、観察法、実験法、面接法、調査法、心理検査法などがある。人間の行動を自然な状況で観察したり、条件が統制された実験的な状況で観察して、行動の法則性を明らかにすることは可能である。しかし、感情や欲求、動機づけといった人間の心の中で生起する主観的なものの解明には、面接法、質問紙法、心理検査法といった研究方法が必要である。本実習では、これらの研究方法を用いて、データの収集、データの分析、報告書の作成などを学習する。(昨年度に他教員によって作成されていた文章を活用)

4.14.金/Cくんの来室：私の授業を聴いてくれている2回生のCくんが研究室を訪ねてきた。臨床心理士になるにはどんなふう<sup>(注)</sup>に勉強していったらいいのかというのが最初の質問で、その後、人間って何だ論に話は広がった。よくいろんなことを考えている学生で、好感をもった。時計を見たら



2時間話し込んでいた。

(注) 文部科学省の財団法人・日本臨床心理士資格認定協会が認定する資格だ。認定協会の認定校である大学院修士課程を修了することが資格認定試験の受験資格の基礎要件となっている。本学大学院人間文化研究科には臨床心理学コースが設置されており、認定校になっている。

4.17.月／大学院臨床心理査定演習Ⅰ：院生9名に新版K式発達検査2001を中心に教える。今日は実際に仕事をしている聴講生に検査者をやってもらって、私が子ども役で検査場面をデモンストレーションした。観たあとの感想で、院生の一人が「感動しました」と言った。何に感動したかはそれぞれ感動一杯でも何とも言えない様子だったが、とにかく感動してそりゃよかったと思った。

#### 大学院臨床心理査定演習Ⅰ(春学期)

主題：子どもの精神発達の査定，発達像や心理的状況の仮説構成に関する演習を行なう。また，ロールシャッハテスト(投影法人格検査のひとつで，提示された10枚のカード上の図柄が何に見えるかを問うもの)のスコアリング(反応を分類するために記号化すること)など基本的事項について扱う。

受講者への要望：演習時間内にできることには限りがあるので，時間外にも自主的に学習を行なってもらいたい。その方法などについては演習で相談にのる。

概要：子どもの臨床においてだけではないのだが，指導的，治療的アプローチを行なう前提として，子どもの状態の査定，仮説の構成を行なうことが必要である。査定の道具としての検査の実施においては，発達指数(DQ)や知能指数(IQ)<sup>(注)</sup>を算出すればすむというものでは決していない。具体的データによって，子どもの目からは世の中がどう見え，耳からはどう聞こえているのかを，その子の身になって思い浮かべられるようになりたい。そのためにも，検査はただ検査をすればそれで

すむというものではないので、検査者と被検査者との関係のなかでの子どもの行動を観察して読む作業が要る。そして、それらの検査者のなかでのみたてほかの統合をとおして、次の援助に移すことができる。<sup>(注)</sup>現場の臨床で必要な新版K式発達検査2001、WISC-Ⅲを中心に、それらの検査を役立てることができるようになるための入門演習を行なう。また、ロールシャッハテストはおとただけではなく、子どもにとっても有力な検査なので、学習を進めるための基礎を確認しておきたい。

(注) 発達指数(DQ)や知能指数(IQ)：両方とも精神発達(前者は身体発達も一部含む)の程度を示す指標で、100が標準だ。

WISC-Ⅲ：ウェクスラーによるウェクスラー式知能診断検査のうち、子ども用を言う。Ⅲは第3版のことだ。

**同日 / 演習ⅢA・発達臨床実習**：1回目の授業があまりうまくいかなかったからと、再スタートのつもりで他己紹介ゲームやちょっとしたロールプレイング、それから目をつぶった相手の手を引いてあちらこちら連れ回っているいろいろなものに触らせたりしてみる「ブラインド・ウォーク」(体験学習の一つ)を、とってもいい天気だったので屋外で体験させた。3階から見ている私に誘導役が手を振ってくれたり、感想レポートにはみんなそれぞれ新鮮だった思いが書かれていて、私自身が新鮮な思いに浸った。キャリア・アップ指導も1回目の授業も欠席していた学生が初めて顔を見せてくれて、よかったと思った。顔を出した初回がこういう内容でタイミングがよかったかなとも思った。それから、学生の一人から「大学院に行かなくても心理臨床の仕事をすることができますか？」と尋ねられた。こういう質問を受けたのは初めてではない。そうだよ、そういうことを思うよねと思った。

#### 「ブラインド・ウォーク」感想レポートのいくつか

- 階段を昇ったり降りたりするのが、幼稚園の子どものように1段1段足を揃えてじゃないと恐くてできなかったし、広い下り坂道を走って

みたとき、坂の角度が見えないからジェットコースターのように、とても恐かった。

- 目が見えないことによって、自分が本当に地面に立っているのかどうか、存在している位置がわからなくて恐かった。
- 目をつぶって走ったのはおもしろくて不思議な感覚だった。花を触ったときは、フサフサした感じが目で見たときの綺麗だという感覚と違って、気持ち悪かった。
- 導き手がいなければ前へ進めなかった。それに、舗装された道とそうでない道では信頼度が違う。
- 目を閉じてでも光影を感じ、まぶたが暗く感じると急に不安になったりした。それに、導き手が自分の前にいると安心したが、横にいると進む方向について何もわからないので不安になった。
- 導き手になったときは、どんなものに触らせようかと考えたり、階段や危険な場所はとくに気遣ったり、相手の立場になって優しくサポートしなければという気持ちになった。

**同日 / Aさんの来室**：志望大学院の英文の過去入試問題の「意味がわからないんですけど」ということだった。単語の意味は調べて一杯書き込んであって努力のあととはとても窺える。一応、私も少しはうろたえても大きくはうろたえない方がいい立場なので、じっくり取り組むことにした。幸い、内容が虐待やDV(ドメスティック・バイオレンスの略で、配偶者間暴力のこと)に関するものだったのでポヤッと全体の感じは描き出したのだが、自転車乗りや水泳(私は泳げないが)と同様、英語に真正面から取り組むことから20年以上遠ざかっている、文法や単語は案外染み込んでいるものだ。でもAさんにさよならと手を振ったのは2時間後だった。

**4.19.木 / 学校臨床心理学**：まだ受講の仮登録段階で受講生名簿をもらっていない。受講生数が不明なこともあってレジュメや資料なしで具体的な話をしている。授業が終わって男子学生がやってきた。「自分には学校臨床

心理学の基礎がないのに、先生の経験の話をされてもわからない」ということだった。私の話している内容はどうかかわかるというので、それでいいよと返した。もしかしたら前の時間にもやってきた学生かもしれないが、顔を覚えていない。そのときは勉強の仕方についての相談だった。その学生がそうかどうかはわからないが、聴くだけは苦手で見ても読むものがないと安心できないタイプの人のことを、あとから思い浮かべた。それから、私は現場の具体的な話をするために現場の具体的な話をしているのではなくて、そのことによって学生の頭や心に入りやすい入り口が作られ、そこから大切なことを自分で考えるための材料や枠組みが頭や心に運び込まれたら最高だ、自分はそう思っているなあと考えた。

**同日** / **心理学基礎実験 B** : 今日私がメインになって担当する日で、YG 性格検査(質問紙人格検査の一つ)の実習だった。冒頭で前回のお詫びと励ましを予定通りに行なった。でもまた失敗。学生が「先週欠席したんですが、先週のレポートを提出していいですか?」と私に尋ねた。私はレポートを出席代わりにしてほしいというニュアンスを強く受け取ってしまったのと、自分は少し甘いと見られているかもしれないから駄目なことは駄目と言おうという気分があいまって、「それは駄目だねえ」と答えた。その子はそうですよねと機嫌よく受け取ってくれたのだが、あとから、なんていうことを言ってしまったんだと後悔した。レポートが出席代わりににはならないにしても、レポートを書くことはとってもいいことで、その学生の勉強したいという気持ちを摘んでしまったんじゃないか…。後日、ペアの先生にも相談して、次回、「欠席してもぜひレポートを提出してください」とその学生にお詫びして、みんなにもそうアナウンスすることにした。それから、女子学生が「先生の学校臨床心理学の授業、わかりやすくて面白い」と告げてくれた。心がパーッと明るくなった。

**4.21.金/Aさんの来室** : Aさんの顔を見た途端に、英語かな!?!と少し身構えた。違った、日本語だった。過去問題集に正答がついていないので答をみてほしいとのこと。本で調べたりもしたが、やはり英語よりずっと楽だ

った。先週の英語は英語の先生に教えてもらいに行ったということだ。…そうだと、やっぱり英語は英語の先生だ。お茶を飲みながら話していると、Aさんのお父さんと私が同じ年だということがわかった。

**4.26. 水／大学院臨床心理基礎実習：**相手と面接しているときの自分を観てみようということで、ロールプレイによる面接場面の面接者としての一人一人の様子をビデオで撮り、それを観てコメントしあった。自分が映っているのがとっても刺激的だったみたいで、みんな歓声じゃなくて悲鳴をあげていたのがとても可愛いらしかった…。内にあるものを表出することについて柔軟な人もいれば硬い人もいて、硬い人がどうほぐれていくか、柔軟さを身につけていくか、みていきたいと思う。

**同日** / **Dくんと出会う：**様子からして心配はしていないのだが、授業への出席率があまりよくないDくとキャンパスで出会った。私から「よう、こんにちは」と笑顔で声をかけた。Dくんはちょっと戸惑ってから笑顔を見せてくれた。今度研究室に話しにおいでよと言えばよかったかなとすぐ思ったが、今日はこれぐらいにしといてやろうかと思い直した。

**同日** / **学生の居場所について：**大学内に居場所のなさそうな学生の居場所をどう作るか、どうアプローチするかについて、教職員の数名で話し合う機会があった。何人かの学生の顔を思い浮かべた。私は、学生課の公式な掲示板のほかに学生用のプライベートな伝言板を設置することを提案した。

#### キャンパスに居場所がない？

私がおもってくるのを忘れた教材を研究室にとりに戻り、再び教室に入ろうとすると、それまでは気がつかなかった教室の横のソファに座っていたaくんが、私を見て立ち上がり、私のうしろから教室に入った。もしかしたら、ほかの学生たちと一緒にいるのがしんどいかもしれない。

aくんは、それ以降、授業に姿を見せなかった。

aくんのメールアドレスを知っている学生を介して連絡をとろうと

するが、連絡がとれない。学生課でaくんの携帯電話の番号と一人暮らしのアパートの住所を調べ、電話をかけるが出てくれない。アパートを訪ねてみたが、呼び出しに回答がない。

驚いた。aくんが授業に姿を見せた。授業が終わってから30分後に研究室に来るように伝えたと、わかりましたとのことだった。

aくんの前に会う約束をしていた学生がいたので、授業の後片付けをしたあと急いで研究室に戻ると、aくんはすでに研究室近くの窓のところにいる。ははあ、キャンパスに居場所がないんだと直感した。

aくんは自分からは話さない。私が尋ねると短く答えてくれたり、首をひねってあいまいにすませてしまったり。彼のいうには、ここ1か月ぐらいずっと部屋にいたそうだ。外に出る気がしなかったみたい。前にも何度かそんなことがあったらしく、彼にとってはそんなに特別なことではなかったようだ。とくに心身に不調なところはなさそうだが、これからの予想や抱負も尋ねてもあいまいだ。授業を長く休んでいるから教室に入りにくかったら私が来るまで待っていたらいいと告げ、私のメールアドレスを伝え、彼のメールアドレスを尋ねたらあっさりと教えてくれた。

aくんは次の日からも授業に出てこなかった。ほかの学生に尋ねると、ほかの授業にも出ていないようだ。電話にも出ないし、メールも打ったが返信がない。

私たちの学生時代ならまったく顔を見せなくても放っておかれて、それが大学というものだったが、いまは少し事情が違うようだ。学生課に行って事情を伝え、aくんのご両親の電話番号を教えてもらった。

aくんからは依然としてメールの返信はないので、ご両親に連絡しようと思うのだが、やはり20歳を超えた人のことについてご両親に連絡をとることに、スムーズには踏み切れない。ご両親に連絡をとってほしくなかったら返信してくださいと本人を脅迫する手もあるが、その脅迫自体がaくんを追い込むかもしれない。いろいろ考えたが、

結局、「明後日の夜、ご両親にあなたのことが心配だと連絡をするつもりですが、元気がどうか返信がほしい」と、実質的にメールで脅迫した。

2日後の昼、aくんから返信が来た。「元気です」私も返信した。「元気ついでに来週の私の授業に出てきてください。それが無理ならば夕方5時までの間に私の研究室に来てください。その日に会えなければご両親に電話します」aくんとは会えなかった。夜、ご両親に電話し、これまでのいきさつをお伝えした。ご両親は恐縮しておられ、aは昔からそういう傾向はあったが、現在そういうふうになっているとは知らなかった、何らかの対応をしますと仰られた。私もできるだけの援助はしますし、aくんにもそう伝えてくださいとお願いした。

その後の動きはまだない。aくんに、来週からはじまる試験は受けてくださいねとメールを打ったが、試験会場に彼の姿はなかった。

私はaくんのカウンセラーではなく教員なので、彼に学生としての動きを求めることをとおして、役に立てることはないだろうかと考えている。秋学期に向けて、またご両親に電話をしながら見守っていくことになるのだろうか。

**4.27.木／学校臨床心理学：**Dくんらしい姿を見つけた。少しだけホッとした。授業に入ると今日はこれまでよりもざわついているし、あからさまに寝ている子もいて、教室の出入りも目につく。聴講生のご婦人も少し眉をしかめられたような気がした。具体的な興味をもってもらいやすい話をしているつもりはあるし、じつとよく聴いてくれている学生も多く目に入っているのだが、昼ご飯後の三時限目ということもあるのだろうか。授業ではシステム論(ものごとは繋がっているという視点)の悪循環(よかれと思ってとった対応が相手を不愉快にし、それによって自分も気分を害して相手に当たるといようなことなど)の話をしていたのだが、こういう状況をどうするのかはまさにこの授業の真価が問われるところだと、あとから考えた。テーマが

目の前にあるのだから「今、ここで起こっていることを扱う」という実践を行なったらいいのだ。具体的にどうもっていかは連休中にゆっくりと考えることにしよう。ワイヤレスマイクで喋っているのだから、学生の間を歩き回って話したりインタビューして回るというのものもあるなと思った。

**同日 / Bさんの来室**：Aさんと一緒に研究室に来たことのあるBさんが一人で訪れた。貸していた本を返しにきてくれたのだ。「先生の発達臨床心理学の授業をもぐりで聴かせてもらったんですけど、先生の話はそういうことってあるよなあってよくわかる」と言ってくれた。学生さままだ。また何かあったら相談にきていいですかと言うので、もちろんいいよと答えると、ニコッと笑ってくれた。

**同日 / 心理学基礎実験 B**：今日は「ストレンジ・シチュエーション<sup>(注)</sup>」法という乳児の行動観察法のビデオを観ての実習だった。みんな熱心に取り組んでいた。先週のYG性格検査のレポートもみんな出してくれた。「もうちょっと待って」と私の目の前であわただしくレポートに表を糊付けしている学生もいて笑った。レポート提出についての予定どおりのお詫びとアナウンスをした。授業終了後、前回私からレポート提出は駄目だと言われた学生は、さっそく非常勤講師の先生に具体的なことを尋ねていた。そして、講師の先生がその学生に1回目の授業でやったと同じような個人データ取りを始めた。個人授業だ。その学生にとってはそのデータをもとに提出したレポートが評価の対象になる。もちろん提出期限に遅れているわけだから、その分評価は下がるが。学生と講師の先生の様子をながめながらとっても暖かい気持ちになった。

(注) 乳児の母親への愛着機能の個人差を測定するもので、ストレスフルな事態におかれた乳児が母親の周囲でどのように行動するかを観察する。

## 2. 連休が明けて5月病？

5.08.月／演習ⅢA・発達臨床実習：連休中に今後の演習の計画を立て直した。



演習だから学生の主体的な動きが求められる。とはいえ、3回生になったばかりでまだ自ら案を出すためのベースがないので、私がたたき台を作ることにした。その計画には秋学期の「現場訪問取材」も入れた。現場の建物を見てそこで働いておられる方から話を聴くことができたと思ったからだ。学生の一人からそんなことをしてみたいという声が聞こえていたこともある。それで、私が思いつく発達臨床現場のいくつかを黒板に書き上げた。そして行ってみたいところにそれぞれ手を挙げてもらったところ、1番は児童相談所、2番は情緒障害児短期治療施設、3番は子育て支援グループ、4番は地域により密着したところということだったので、私がe市保健センターを挙げた。取材実施は秋学期の予定だから急がなくてもいいのだが、学生の取材を受けてくれるかどうか、この4つの現場に私の方で打診しなければならぬ。この現場訪問取材にみんな興味をもったようだ。学生からの控え目な希望や意欲みたいなものを受け取った感じがして、私も希望の灯がともった。それ以外の授業計画についても意見を聴くと、「やってみなけりゃわからないから、先生の計画のままでもいい」ということだった。発達臨床実習では「面接の基礎」として、相手の話の聴き方、オープンな質問やクローズドな質問(注)の仕方などについて実習した。そして、大学院の授業でやったのと同じように、面接者役をとっている学生の様子をひとり20秒ぐらいずつビデオカメラにおさめ、あとからみんなで観てみた。ところが、映っている自分に対するコメント、映っている他の人に対するコメントがほとんど誰からも返ってこない。その様子は、照れてるとか気を遣っているとかというよりも、自分のことを評価の対象として定める、他の人のことも対象として定める、つまり自分にも相手にもきっちり対峙して意見をもつということの習慣の乏しさのように、私には感じられた。

(注) オープンな(開いた)質問とは、「どうですか?」のように答の自由度が高くなる質問で、逆にクローズドな(閉じた)質問とは、「元気ですか?」のように答が限られる質問だ。

同日 / Eくんとのお会い：今日は車に乗って来ていたので家に帰るために駐車場にいくと、「学校臨床心理学の先生ですよ〜」と呼ばれられた。2回生のEくんということが話の途中でわかった。Eくんは子どもの臨床の仕事に将来つきたいと思っているそうで、今後どうしたらいいのだろうかということだった。臨床心理士という言葉に、それはおとな相手の臨床をする人というニュアンスを感じとっていたらしく、私の話を聞いて誤解は解けたようだ。でもまだ2回生になったところだから、子どもに関わるいろんな幅広い職種のこと視野に入っていた方がいいことや、学生生活を楽しむことなども話題にした。とても真面目に熱っぽく自分の希望に関することをたくさん喋ってくれた。30分くらいの立ち話だったが、青年と話した実感があつた。

5.10.水/大学院臨床心理基礎実習：2日前、面接をビデオで撮って3回生にコメントを求めたときに私が感じたことを、5名の院生に投げかけてみた。院生と3回生とはそんなに年も違わない。でも院生は臨床心理士を目指していて、今後、自分たちと同じぐらいの年齢のクライアントを相手にすることもあるわけだ。心理臨床は単なる技術ではないとすると、心理士自身の発達課題と無関係のところクライアント(相談を求めてきている人)の発達課題は語れないし、どうしても自分自身を見つめるという作業が必要になると思うのだ。「3回生を見ていてそんな感じがしたんだけど、どう思う？」…私が話しているときにはうなずきながら聞いていた人が多かったから、院生たちもそれと同じような側面を自分に感じているのかなと思いつつ喋っていたのだが、上記の問いを出すもみんな言葉に出せないのか出さないのか、ちょっとは待ったがなかなか声が聴けなかった。でも追求するようなシチュエーションでもなかったから、私はあっさりと引き下がった。心のなかでは、今後学生に対して焦点をしばって取り組むべき課題の一つがちらついた。この日は事例検討を行なった。私が書いたある事例報告の文面を四分割して四枚のシートを作り、まず最初の1枚だけを渡した。そして、そこに書かれたクライアントや家族に関する初期情報だけを

材料にして、どんなことがこの家族に起こっている可能性があるかなどの仮説を描くディスカッションをしてもらった。順次シートを渡して検討していくことによって、ただケースの流れにそってそのケース執筆者の考えたとおりの意味などについてそうだと思わされるのではなく、ケースに含まれていた事柄、含まれていたかもしれない要因をより豊富にイメージする練習ができればいいと思う。活発にとまではいかなかったが、初めて(?)にしては、みんなよく考えよく喋っていたと思う。自分の頭で考え自分の言葉で話しているなあと思える人、専門用語に引っ張られて思考が固くなっているように見える人、いろんな感じはつかんでいるけれどもそれを言葉にするのがスムーズにいかない人…これから、それぞれがどのようにこなれていくのだろうか。

5.11.木／学校臨床心理学：この授業クラスの私語や睡眠、教室内外の出入りなどになぞらえ、「学級崩壊」をテーマにして話した。「学級崩壊」にはほど遠いさざ波程度の乱れではあるのだが、学生を批判せず、あくまでも「よくあるそのこと(私語や出入りなど)」を成立させている要因について検討しようとしたのだ。このことが、たとえば叱責によってさらにぎわつくという悪循環を生まず、逆に場を崩壊とは逆の方向にコントロールする効果をもつかなという期待も胸のうちにはあったのだが、少しは効果はあったかもしれないものの、やはり部分部分の私語は引き続いていた。これについてはコントロール効果云々以前に、学生が私の話を聞いていなかった可能性を考えなければならない。しかし、中身によっては耳に届いて反応していたので、私が結構インパクトがあるのではないかと考えてした「このクラスの学級崩壊」の話は、彼らにはインパクトを与えなかったと考える方が適切なような気がする。それとほぼ確からしく思えるのは、話の一般性、抽象性が高まるほどぎわつくことだ。反対に、学校のリアリティとということに関連させ、これぞリアリティ！として長谷川集平の絵本「はせがわくんきらいや」をプロジェクターでスクリーンに写し出し、私が文章を呼んでいる間は、シーンとしてそれは静かなものだった。それにしても

私語をやめない学生の発達課題は、自ら対象化するものを意思として定めてそこに照準を当てるという主体性の後退、そして、話の内容や状況によっては私語をやめて講師に向かったり、また状況が変われば私語の相手と共存しているとすれば、それはまさに受け身性のあらわれなのだろうか。授業が終わった後に思ったのは、またその私語のことだ。次回の授業でもやはり私語が気になれば、「いま、私語をしないで聴けるような授業ができていないことがぐやしいけれど、私語をせずに聴いてくれているほかの人の迷惑になるので、黙っていてくれますか。ありがとう」と、やっぱり言った方がいいかなということだった。いやいや、講師と受講者という非対称の関係にいかにか公平性を持ち込むかというのは、難儀だが面白いことではある。

(注) 学級崩壊：教室のなかでの子どもたちの自分勝手な行動によって、担任教師によるクラス運営が制御不能になっている様をさす。

長谷川集平「はせがわくんきらいや」1976 すばる書房：森永ヒ素ミルク事件によって身体の弱い子どもとその友だちとの交流を描いた作品。

**5.17. 水／大学院臨床心理基礎実習**：6月初めに精神病院に見学に行くことが決まり、実習時の先方に対する振舞についても研修しておくことが必要だと思っていたので、やることにした。でも、若い人たちに礼儀を教えるということが少々年寄りっぽく思えたので、初回面接のはじめに重要なこととして、まずクリニックに来られたクライアントを部屋に招き入れインテーク(相談初期の情報の聴き取り)を始めるところから、「どのようなことでおいでになられましたか」と尋ねるところまでを、5名の院生にそれぞれロールプレイしてもらった。少し表情が硬いかなと気になっていた院生がカウンセラーをやったときには、クライアント役の院生が「マジガオ(真面目な顔)で恐かった」とフィードバックし、当人は「そんなふうに思われるなんて思ってもみなかった」と感想を述べた。体験学習で起こることにまかせることの面白さを思った。妄想のあるクライアント役の院生が不安そうな顔で、いきなり「信長が迫ってくる」と言い出したときには思わず笑ってしまった。次には、インテークが済んでいるクライアントに意

図をもって初回面接で接するという設定で、院生たちに話し合ってもらったうえでカウンセラー役を1名選出してもらった。クライアント役は私で、中学校の教頭先生だ。学校のことがうまくいかず意欲が減退しているという主訴。学校臨床心理学の授業で教師のバーンアウト(燃え尽き症候群)のことを扱っていたものだから、結構その役にはまり込んだ。カウンセラーは途中で選手交代しながら進めていった。やはりクライアント役をやると、自分が思いをもって発言したことと、それをカウンセラーが要約した内容との微妙なズレにこだわる気持ちが出てくる。最後に、これも関係者との関係をスムーズに運ぶ臨床技術だとして、精神病院訪問時とおいとまする時の挨拶をどんなふうにするかをみんなで話し合ってもらった。そして実際にやってもらったが、病院の事務長役の私は、気持ちよく「いやあ、みなさんご苦労さんでした。またおいください」と返すことができた。そして、実習先の相手が講義してくださるときはノートをとること、質問を積極的にすることなども必要なこととして付け加えた。今日は、みんなとても明るく積極的に取り組んでくれた。ロールプレイをもっとしてみたいという声があった。

### 学生たちへの援助

欠席の多い学生への対応について教職員が懇談した席で、私はこんな発言をした。

「私はこの3月までは大学の外にいましたが、大学の外の価値観は、大学生に対してなぜそこまで面倒をみようとするのか？というものです。でも、私も大学のなかに入りましたし、実際に心配している学生がいます。授業を休む理由が社会化の方向だったら放っておいてよいかもしれませんが、非社会化の方向でしたら、やはりどうかしなければなりません。実は、いま先生方も心配な学生たちにどうアプローチしようかと頭を悩まされているわけですが、それを聞きながら、その内容はまさに児童相談所的だなあと感じていました。児童相談所は

心配な子どもたちのことについて協議し動くのが仕事でして、その場合の鉄則みたいなものがあります。それは、まずその子やそのご家族のことについてよく知っている人から調査したうえで、その次の動きを企画するというものです。具体的にわれわれの大学生のことでいうと、たとえば、その学生が卒業した高校の先生に会いに行くということです。でも、児童相談所の場合はそのような調査を行なう権限が児童福祉法に書かれていて守られています。ところが、大学の教員の場合、そこまでやるのかという問題と、やるとして個人情報の関係からしてどうなのかという問題を検討しなければならないと考えます」

たとえば、大学の成績を親に知らせることについては、個人情報保護法にそって学生から了解をとっており、もちろん親に知らせることについて拒否の意思を示している学生の場合は知らせないことになっているようだ。それに準ずるとすれば、長期に欠席している学生についてそのご両親に連絡をとりたい場合は、学生に了解を求めることが必要だし、拒否されれば連絡はとれないのではないかということになる。しかし一方で、学生自身のことを考えると、個人情報保護法の本人以外への情報提供に関する適用除外項目にあてはまるかどうかを事例ごとに検討しなければならないし、大学の教育機関としての責任を考えても、単に学生が拒否しているから手を打たなかったということではすまない場合があるだろうとも考えられる(大学の責任云々はともかくとして、この場合の親への連絡は、上記の本人以外への情報提供に関する適用除外項目に該当するという見解が有力のようだ)。実際に大学がそこまでやるのかどうかについて、イエスからノーまで幅広い意見があると思われるのだが、児童福祉経験者の私は何らかの対応をしたくなる。それが裏目に出る場合もあるのだろうが。

**5.18. 木／学校臨床心理学：**国旗掲揚や国歌斉唱のこと、職員会議での挙手禁止などの教育行政の動きや教師の精神保健の問題を取り上げた。しかし

気になるのは、そういう教育・学校のマイナスの側面を強調すると、教職に就きたいと思っている学生の気持ちに水をさすのではないかということだ。私は、こういうしんどいこともあることをわかったうえで自分が教師になって戦ってみたいと思ってほしいから話すだとか、マイナス面を強調しているがもちろんプラス面もいっぱいあるとか、何も教師に限ったことではなくてどの世界にもある、でも教育現場特有の問題もあるとか…、何回も口にしてはいる自分の焦りに疲れた。べつに焦ることはないか。私語がある程度以上あれば前回用意したセリフを…と思っていたが、あまりいい話ができていないなあと思いながら話していたのに、なぜか今日は比較的静かな教室で、そのセリフは次までお預けとなった。

**同日** / **心理学基礎実験 B**：面接法の実習で相談的面接、つまりカウンセリングの基礎的なことを取り上げた。4人1組、それもあまり親しくない者同士で組むように指示した。学生たちがそういうのが苦手だということは承知していた。でも、やらせてみたいと思ったのだ。出席簿の順にグループ分けするというのも芸がない。さあよろしくと伝えて動きを見ていると何も動き出さない。私の説明がわかりにくいのかと、より砕いて話しても動きは円滑にならない。学生たちにとってとんでもない指示は、そんな指示はあるはずもないという前提のために了解しにくいのだろうか。それでも男子学生は、男子が比較的多いこともあってか私のサポートに従って動いてくれる。どうしたらいいかわからず座ったままなのは一部の女子学生。とくに先にできた男子ばかりのグループに女子が入るように指示すると、女子の戸惑いはこちらがびっくりするほどだ。それを見て男子学生も何かしらキョロキョロしだして気遣いの応酬。「そりゃ女子が入らなきゃあ」と私の言を後押しする内容の男子学生の軽口も、少し浮ついて気遣いに溢れている。そしてやっとのことでグループ分けが終了。たかがこれだけのことで…私の感じすぎかもしれないが、学生たちの対人関係性は実際のところこんなにも“相互介入的”の逆をいっているのだろうか。実習はスムーズに進んだし、相互フィードバック、レポート作成にも、感心するぐ

らいまじめに取り組んでいた。可愛い学生たちよ。

**5.22.月／演習Ⅲ A・発達臨床実習：**応答構成法というカウンセリングの学習法がある。クライアントの発言の抜粋を読んで、クライアントは何を伝えていてどんな気持ちなのか、それを聴いてカウンセラーはどんな気持ちになっているのか、それらをふまえてどのようにクライアントへの応答を構成していくのかなどについて、順を追って書き出していく。そして、みんなが書き出したものを見ながら相互に意見交換するのだ。それをやった。とはいえまだ3回生なので、カウンセラーの訓練というよりはクライアントの心情の理解ということに重点を置いたつもりだ。各自が書いて貼り出し、それぞれ自分が書いたことについての口頭説明をさせたまでは順調にいったのだが、例によって感想や意見が一言も出ない。いろいろと促すのだが、みんな貼り出されたものをじっと見ているだけで固まっているようだ。私はまたこのパターンにハマってしまったという焦りを感じながら、指名して発言を求めることも忘れていた。たしかにみんなが書いたものは似かよっていて、そこに何か物申すには微妙なニュアンスの読み取りと、その微妙なものを発言するのだというこの実習の価値を把握していることなどが必要だろうから、3回生になったばかりの彼らにはむずかしかったかもしれない。

**同日**／大学院新入生歓迎コンパ：私も新入生だそうで奢ってもらった。大学院を終了した研究生のみなさんも来られていて、20人足らずの集団は先生たちも含めて大きな家族のような感じがして、心地よい時間を過ごした。

**5.24.水／大学院臨床心理基礎実習：**3回生の演習で行なった応答構成法を院生にもやってみた。さすがは院生。自殺企図のある女子高校生の発言を用いたが、自分の応答構成の思い、自分のなかに生じたことと実際の応答とのつながりやズレ、他の人の応答と比較しての自分の応答やあり様に対する評価等々、ゆっくり静かにだが、けっこう発言があった。みんな真面目に取り組んでいる。他の人の応答に対するコメントはなかなか出にくいようだが…。



**5.25.木／発達臨床心理学：**この授業には50名程度が登録しているのだが、1時間目ということもあるのか、きょうの出席は始まり時点で半数ちょっとだった。5月の連休直後より少しズレて五月病が始まっているのだろうか。でも学生の少ない授業は好きだ。一人一人と関係をとりながら話している感じが強く、落ち着いてていねいに喋れるし、講義をしながら遅れてきた学生に資料を手渡すときにはとても優しくなれるし、学生も静かによくこちらを見て聴いてくれるからだ。それと対照的なのが学校臨床心理学の授業で、120名ぐらいが登録していていつも90名以上は出席しているので、それだけで疲れる。学校臨床心理学は長い長方形の平たい教室なのだが、発達臨床心理学は階段教室。私が上から見下ろされるわけだが、案外、それが落ち着く。

**同日／学校臨床心理学：**児童相談所では面接室だけで仕事をしているのではないことを伝えるための一つとして、子どもたちのグループワーク(療育事業)の話をした。琵琶湖一周サイクリング、四万十川下り、小学生健全育成楽しさ満載キャンプのことなどだ。本当はビデオや写真を見てもらえれば一番いいのだが、そういうものもなかったので文や図と私の喋りだけになった。こういうことをしましたという事実を伝えることが多くなってしまって、そのことに私も疲れるし聴く方も疲れるということになっていく。そうするとこの授業はうまくいってないと思うので、私の心の中は不安定感が徐々に増すという悪循環に陥る。そこで気になってくるのが学生たちの私語だ。用意していた言葉を解禁することにした。「いま私語をしている人たちが私語をしないでもすむような授業をできていないのが自分に対してくやしけれど、一所懸命聴いてくださってる人もたくさんおられて、その人たちの大きな迷惑になるので私語はしないでくれますか」。後半部分をあと2回繰り返したら、それでやっと静まった。とはいってもそんなに騒音が並はずれてひどかったのではないのだが、私の不安定感との相乗効果でそう言うはめになって、でもやっぱりこういうことを言うのは後味がよくない。穏やかに言っているのだが、全体としてうまく

いってない感じがやはり疲れを呼ぶ。大教室だという要因はたしかに大きいのだが、そこに出席していなければならないように講師あるいは大学が学生を拘束しているとして、でもその拘束は、講義を聴くという拘束を自分にかけていない学生にはそれ以上の機能を果たさない。ウケれば注意を向けてくれるわけだが、ウケをギャグではなく勉強の中身で狙いたいのは、それはもうそのとおりだ。

**同日 / 心理学基礎実験 B** : どうも前の授業の影響が続いていた。ペアの実験心理の先生が講義しておられるのに友だちに向けて喋っている子がいる。「静かにしなさい」と言いに行った。小学生に言っているようで、そんなふうには言わなきゃよかった、もっと大学生に似合うようなアプローチの仕方があれば、相手もそれを受けて大学生らしくなるのかもしれないのにと、言ったあとの決して清々しくはない余韻の中でぼんやりと考えていた。

**5.29.月 / 演習Ⅲ A ・発達臨床実習** : ゼミで学生たちにどんな授業を提供したらいいのか、私の意図と学生の受けとめの感じとがいま一つピタッとこずに、気分は迷走状態だった。そこで再々度仕切り直しということで、今回以降春学期最終までの内容案を考えて配った。体験学習的なものは先週までとして、私から具体的資料などを提示して一定のメッセージを伝え、それを受けて話し合いや作業をしてもらうことにした。今回は統計データを示し、それが何に関するデータかを当ててもらおうところから入った。少年による殺人や強姦の件数の推移、“ニート”(日本では「学生でもなく働いてもなく、就労の訓練もしていない若者」の意)と呼ばれる若者の実態調査グラフなどだ。そこには世間で流布されている言説とは逆の実態が示されていて、それが何を示しているのかについて話した。みんな興味をもって聞いてくれていたようだし、ちょっとした質問にもよく考えて答えてくれた。授業のあとで、「少年による殺人が長い目で見ると実は減ってるなんて全然知りませんでした」と言ってくれる学生もいて、きょうの授業はちょっとピタッときたかな、これでいいかなと思った。それから、再来週にみんな英語の論文を読むことにしていたので、二週間前の今日、その論文を

配った。思ったほどのどよめきはなかったが、学生たちのちゃんと勉強したいという思いの表れかなと思って、逆に私の背が少しシャンと伸びた。Fさんから就職に向けたインターン・シップ(企業などでの就労実習)参加への推薦文を頼まれたり、もうひとつ一体それは何だったのかはよくわからなかったけれど、男子学生が私の上着を「先生、昼休みの間だけ貸して」と言って着ていたり、直接的な学生との交流があって少し嬉しい気分になった。

**同日 / Aさんの来室**：卒業論文準備中のAさんが来室した。質問紙を使って親子関係に関する調査をするようだ。インターネットで探した新しい親子関係に関する質問紙がそのまま自分の調査に使いそうだったので、業者に必要な部数を取り寄せる電話をしたそうだ。大学生を対象にたくさんのデータをとるわけだが、先輩から、大教室でデータをとるとふざけた回答が多くなると聞かされたようで、中小教室でデータをとりたい場合は私の授業を利用したらいいよと伝えた。

**同日 / 奨学金面接**：大学奨学金を学力優秀で大学の発展に寄与する学生に対して給付するために、支給を受けたいと申し出た学生に選考面接する役を学生委員の一人として引き受け、今日がその二次面接だった。学生3名同席の面接を2人の教員で15分ほど行ない、それを4回ほど反復した。みんな通してあげたいというのが本音だ。この奨学金は毎年募集されるので、選考に落ちた学生には来年また応募してほしいものだ。

\* 個人の描写については、内容の本質を歪めない範囲で変更を加えた。

(次号の「下」に続く)